

【講評文】8月11日（木） 12校目

## 「文學の子」 長良高校

それぞれの時代を生きる人達が、それぞれに葛藤を繰り返しながらも本と文學という媒介を通じてその時を生き、自分達の意志を後世に繋いでいく。いつの時代も「今」を懸命に生きる人々が、文學に触れることでその人生を変えていく様子に鼓動が高鳴ります。上演後は壮大な小説を見終わった後のような満足感を得る劇でした。時代を交差する難しい作品にも関わらず、劇中で時代が変わっても違和感なく、手の込んだ衣装や場転のスムーズさによって物語の情景が頭に入ってきやすかったのも、この劇を非常に見ごたえのある作品にした脚本と演出の妙といえます。▼全体的にキャストのレベルが高く、動きが多くてもブレることなく体を支えているのが素晴らしかったです。聞き取りにくいセリフも少なく、基礎訓練をしっかりとされていると感じました。大女優の歌のソロにもう少し声量が欲しかった所ではありますが、どの役者も物怖じせず振り切って演じていたため、登場人物のやり取りがしっかりと伝わり感情移入しやすく、上演時間があっという間に感じられました。全員がそれぞれのキャラクターの個性を的確に捉えていたためか、セリフに合った表情と動きに引き込まれました。▼音響では、場面にあった音量が絶妙で、音の入りも的確でした。特に時代を行き来するシーンは、舞台上全てが一体となっている感覚すら覚え、観ていて鳥肌が立つほどです。▼照明では全体を通して見事というほかない技術が使われていました。3つの時代を行き来する本作では、混同しやすい時代変化を時代ごとで変化をつけることによって工夫されていました。戦争のシーンでは舞台前方やスポットを効果的に使うことで、戦争というものの放つ不気味な様子が感じられ、そこでインターネットを使用する場面では、それを扱う彼女たちではなく、インターネットの方に光が当てられていたことによって情報の解放と自由を連想させられ「先の未来は明るい」ことを予感させていたあたりは、学ぶところの多い演出であると思います。坪内逍遙を軸とする明治の場面ではエッジの緩い明かりが、現代はあえてエッジを出す当て方と、時代にあった演出方法にとっても引き付けられました。▼装置では、大黒を使いながらも圧迫感はなく、大きな本棚とその配置バランスで舞台全体を広く使われていました。美しく作りこまれた存在感のある本棚は、同じものでもキャストと照明の雰囲気を変えることで全く違った印象に見せる手法で、全ての場面に驚きと感動を与えてくれました。

長良高校のみなさん、お疲れパッションでした！

(文責 本巣松陽高校 村瀬英奈)